

学校だより



平成26年4月30日

横浜市立二谷小学校
校長 渡邊 文子

世界の通学路

学校長 渡邊文子



新学年が始まってひと月が過ぎました。一年生も少しずつ学校に慣れてきたようです。金曜日に行われた全校なかよし遠足では、素晴らしい天気のもと、広い原っぱで存分に遊ぶことができました。一緒に手をつないで歩いたり遊んだりする中で、高学年の子どもたちは優しさを発揮してくれました。これから一年間、このような縦割りの活動を通して、子ども同士が豊かな関係をさらに築いていけるように、心のうちに育つものを大切にして取り組んでいきたいと思えます。行き帰りの道で、見守りをしてくださった保護者・地域の皆様、ご協力ありがとうございました。

さて、今年も校外委員の皆様をはじめ、保護者・地域の皆様には学援隊として登下校の安全を見守っていただいております。皆様に比べたら、本当に数少なくして申し訳ないのですが、私も学校近くのトヨタ交差点で旗当番のお手伝いを時々させていただいています。そんな時、とてもすてきな光景に出会うことがあります。特に、新学年が始まったばかりの春の登校風景は、心温まります。

家の人がいなくても、友達と楽しそうにおしゃべりしながら来られるようになった1年生。小走りに行く1年生の後ろから「走っちゃ危ないよ。」と気遣って声をかける2年生。家の方が「行ってらっしゃい。」と手を振っているのを何度も振り返りながら「行ってきます。」と手を振る子。このような朝の笑顔を見ると、下校する時も笑顔で帰ることができるようにしなければ、と心から思えます。

先日、小学生新聞に取り上げられていた「世界の果ての通学路」という映画を見ました。ケニア、アルゼンチン、モロッコ、インドに住む4人の子どもたちの登校風景を取り上げたドキュメンタリーです。妹と一緒に15km離れた学校まで2時間かけて登校するケニアの少年。兄妹は野生の象を避けながらサバンナを駆け抜けます。足が不自由なため二人の弟に車椅子を押してもらいながら1時間15分かけて登校するインドの少年。途中で車椅子が壊れたりして、通学路はハプニングの連続です。けれども、彼らには夢があります。そのために、どんなに遠く過酷な道でも、毎日学校に通います。屈託なく笑い助け合って登校する姿に、私は大いに励まされ考えさせられました。

「人生を切り開くために学校に行く。」来日したケニアの少年が、日本の小学生に語った言葉です。(毎日小学生新聞4月10日)対談した日本の小学生は、「今まで学校に行けることは当たり前と思っていた。」と感想を述べています。学校は彼らにとって未来への希望の場所です。学校は学ぶところ。そしてその学びは未来につながる大切なものであるということを日本の子どもたちにも伝えていきたいと思えました。

環境も生活も異なる世界の子どもの通学路ですが、ケニアの兄妹が朝家を出る時、両親は無事を祈ってお祈りをして送り出します。子どもの無事を祈る親心は、世界共通です。

先日の学校説明会資料にあった給食室工事予定について、お弁当が必要なのかというご質問がありました。工事は夏休み中ですので、お弁当の必要はありません。補足させていただきます。